

モンゴル襲来と千葉氏

九州北部が異国船に襲われた文永の役（文永11年：1274）と、弘安の役（弘安4年：1281）を「元寇」と総称しますが、現在は「蒙古襲来」あるいは「モンゴル襲来」と呼ばれる事が多くなってきました。

下総の守護としてゆるぎない地位を築いた千葉氏ですが、モンゴル襲来（文永の役：1274）に際して千葉介頼胤は九州に下向し、その所領である肥前国小城郡で没したと伝わります。

今回は、千葉氏に大きな影響を及ぼしたモンゴル襲来に係わる本を展示いたしました。

[資料リスト](#)

千葉氏と九州

桓武平氏略系図

桓武天皇—葛原親王—高見王—高望王—良文—忠頼—忠常—常将—常長—常兼—常重—常胤—胤正—成胤—時胤—頼胤—宗胤—胤貞＝胤泰（肥前千葉氏、以下略）
 | |
 泰胤 胤宗—貞胤（千葉介、以下略）

千葉氏は源頼朝の挙兵の際、常胤がこれを支持して大功をたて、下総国守護を世襲することとなりました。そののち千葉氏が九州と関係を持つことになったのは、元暦元年（1184）から文治元年（1185）にかけて平氏追討のため源範頼は西国に向かいますが、常胤は老齢にもかかわらず追討に従軍しました。頼朝はこれを賞して「鎮西守護人」に任じています。

その結果、常胤は肥前国小城郡（佐賀県小城市）、薩摩国島津庄内の5か郡（鹿児島県薩摩川内市）、大隅国菱刈郡入山村（伊佐市）などの所領を獲得しました。このうち千葉氏本宗家に相伝されたのが、肥前国小城郡惣地頭職でした。

但し、元寇以前に小城郡に下向して在地支配を行ったのは泰胤のみと思われます。泰胤は下総国千田庄（千葉県多古町、旧栗源町）を本領として千葉次郎と称した有力御家人であり、また、千葉氏本宗家の権威確立を担ったとされています。

モンゴル襲来と千葉氏

モンゴル襲来に際し、鎌倉幕府は九州に所領を持つ御家人に本人が下向するように命じました。その時に千葉介であった頼胤は小城へ下向し、文永の役（1274）に従軍しましたが傷を負い建治元年（1275）に亡くなりました。その遺跡を嫡子の宗胤が継ぎ、宗胤の死後、子胤貞の系統が肥前に土着しました。なお、下総の本領は宗胤が九州を離れることができないため、宗胤の弟である胤宗、その子貞胤の系統が千葉介を継承しました。

宗胤は小城郡惣地頭職の他に、筑前国今津（福岡市西区）の地頭職に就くと共に、大隅国

守護に補任されました。また、モンゴルの再来襲に備えて今津後浜で異国警固・石築地（防塁）役に従事しています。宗胤は永仁2年（1294）30歳で亡くなりました。

宗胤の嫡子胤貞（千葉太郎）は、成人した正和年中（1312～1316）頃に小城へ下向したといわれます。胤貞は足利尊氏（北朝方）に属して各地で転戦し、あるいは所々に移動しましたが、そうした中で本拠地を下総から肥前に移していったようです。

胤貞は足利尊氏（北朝方）に属しましたが、千葉介を継承した貞胤は新田義貞（南朝方）に属しました。鎌倉幕府滅亡の混乱期に、下総では北朝方の胤貞と南朝方の貞胤に分かれた在地の土豪たちが、千葉庄や千田庄において戦いを繰り広げました。建武2年（1335）には、胤貞が一族の相馬親胤と共に、貞胤方の本拠である千葉楯を攻撃しています。

胤貞は建武3年（1336）11月九州から下総に向かう途中で亡くなります。また、貞胤はその直前に足利方に帰順していましたが、これで下総国内の争乱は一応の決着をみます。

肥前の千葉氏

千葉氏は常胤の代から九州に所領を獲得していましたが、鎌倉時代に肥前国小城郡で足跡が認められるのは、時胤・頼胤・宗胤・胤貞です。その一例として、千葉氏が大番役勤仕で在京している時、小城郡内で山岳寺院岩蔵寺の寺務職をめぐる争論が起こり、千葉氏は当事者である寛覚を上洛させて訴訟の審理を行いました（建長7年（1255）「岩蔵山院主律師寛覚陳状」）。

胤貞は、建武元年（1334）に肥前国小城郡と下総国千田・八幡両庄の知行分の惣領職を嫡子の胤平に譲ります。しかし、胤平は没落したため肥前の所領は胤泰が、下総の所領は胤継がそれぞれ知行しました。この胤泰が建武4年（1337）頃までに小城郡を継承し、肥前に初めて本拠をおいた千葉氏の初代といわれます。

胤貞・胤泰は肥前国一宮河上神社に田地などを寄進し、あるいは同社の座主と宮司の相論を裁くなど、河上神社の支配を強めていきました。また、胤泰は同社の大宮司職に就任し自身の権威を高めています。その後、この職は代々千葉氏に受け継がれていきました。

肥前の千葉氏は室町時代（15世紀）に小城郡から佐賀郡、杵島郡と勢力を広げ、肥前で最有力の勢力となりますが、戦国時代初期に東西両家に分裂し、東千葉家の当主は少弐氏滅亡時に自刃しました。西千葉家は竜造寺氏、鍋島氏に仕えて江戸時代は鍋島姓を与えられ、佐賀藩に家老として仕えました。

元 -モンゴル帝国-

元の成立 モンゴル人が13世紀に東アジアにたてた王朝名を元といいます。モンゴルは7世紀に現れ、11世紀にその王族テムジンが頭角を現して、モンゴル高原の全遊牧民族の指導者になりました。テムジンは即位してチンギス・カン（太祖：在位1206-27）と号し、モンゴル（蒙古）帝国（1206-1368）をたてました。チンギス・カンとその子らは、当時アジアには強大な国が無かったこともあり、各地を征服していきました。

チンギス・カンは、金の黄河以北、西夏、西遼、ホラムズなどを征服し、オングト、ウイグルを服属させました。チンギスの第三子であるオゴタイ・カーン（太宗：在位 1229-41）は、金を滅ぼし、イラン、カフカズ、東ヨーロッパを平定し、また、高麗征伐を開始しました。

オゴタイの死後はその長子のグユク（定宗：在位 1246-48）が継ぎましたが短命で、そのうち内紛が起こっています。グユクの後にはチンギスの第4子であるトルイの長子のムンケ（憲宗：1251-59、モンケとも）、次いでその弟のフビライ・ハン（世祖：在位 1260-94、クビライ・カンとも）が即位しました。

モンゴル帝国の支配者が、オゴタイ系からトルイ系に移ったことでモンゴル帝国は分裂の傾向を強め、フビライの即位にあたり弟のアリクブカと間で内戦が起り、モンゴル帝国は分裂しました。フビライの所領（元）の他、中央アジアにチャガタイ・ハン国、イラン・イラクの辺りにイル・ハン国、ロシアにキプチャク・ハン国が出現しました。

フビライは、行政（中書省）・軍事（樞密院）・財政（尚書省）・監察（御史台）の諸機関を整備して、都をカラコルムから大都（現北京）に移し、1271年に国号を大元と改めます。1273年4月に高麗の三別抄の反乱を平定し（武臣政権の服属は1260年）、1279年には南宋を滅ぼして中国全土を支配します。

元の中国支配 元は中国支配にあたり高官にはモンゴル人や中央アジア・西アジア出身の色目人を就任させ、儒学は軽視しました。

遊牧民のモンゴル人は商業の利益を重視し、駅伝制を設けて交通路の整備に努めたので、貿易が盛んになりました。また、江南の豊かな物資を北方に運ぶため、運河を造り、海路を整備しました。その結果商業が繁栄し、紙幣が普及しました。

元はやがて王室の相続争いや、財政の悪化で衰亡していきます。1351年に大運河・長江沿いに秘密結社紅巾の乱が起こり華北・華中は大混乱になりました。こうした中で紅巾出身の朱元璋（明の太祖）が1368年大都を陥落させ元を北方に逐いやります。

南宋攻略 元は中国全土の支配のため南宋討伐を行いましたが、日本は南宋と貿易を行い南宋の経済を支える一助を果たしていました。そのため、フビライは高麗を介して日本を南宋から切り離すため、招諭使を日本に派遣して対日交渉を行ったのです。

招 諭 使

モンゴルはいきなり日本を襲ってきたわけではありません。中国の歴代王朝と同じく周辺諸国・諸民族に朝貢を求め、それに応じない場合に征討をしたのです。

朝貢を求めることを招諭といい、そのために派遣される使者を招諭使とよみました。モンゴルを統一したチンギス・カンの孫で、モンゴル帝国の第5代皇帝フビライ・ハンは、何度も招諭使を日本に派遣しています。

招諭使年表

回	招諭使名	年 月	行 動
第1次	黒的、殷弘、宋	文永3年（1266）8月	フビライ、黒的らを高麗に派遣。

	君斐、金ヒヤン	" 11月 文永4年(1267)1月	黒的らが高麗到着。高麗の都・開京出発、但し、巨済島から引き返します。 黒的ら、開京に戻る。
第2次	黒的、殷弘、潘阜	文永4年(1267)6月	フビライ、黒的らを高麗に派遣。
		" 8月	黒的ら開京到着。潘阜が開京を出発。
		" 12月	潘阜が対馬到着。
		文永5年(1268)1月	潘阜が大宰府に到着しますが、日本の返事は得られず、追い返されます。
		" 5月	潘阜、離日。
		" 7月	潘阜が開京に戻ります
第3次	黒的、殷弘、申思佳、陳子厚、潘阜	文永5年(1268)9月	フビライ、黒的らを高麗に派遣。
		" 11月	黒的ら高麗到着。
		" 12月	黒的ら開京を出発。
		文永6年(1269)2月	黒的らが対馬に到着しますが、島民とのトラブルで引き返します。
		" 3月	黒的らが開京に戻ります。
第4次	ウルタイ、ウテイ、金有成、高柔	文永6年(1269)6月	フビライ、ウルタイらを高麗に派遣。
		" 7月	ウルタイら、開京に到着。
		" 7月	金有成ら開京を出発。
		" 9月	金有成ら対馬到着。その後大宰府に移動。
		文永7年(1270)2月	金有成ら離日か。
第5次	趙良弼	文永7年(1270)12月	フビライ、趙良弼を高麗に派遣。
		文永8年(1271)1月	趙良弼が開京到着。
		" 8月	趙良弼が開京出発。
		" 9月	趙良弼が筑前今津に到着。ついで大宰府に移動。
		文永9年(1272)1月	1月以前に趙良弼が一旦離日か。
		" 1月	趙良弼、一旦開京に帰還か。
		" 5月	趙良弼、再び開京出発か。
		文永10年(1273)3月	第5次招諭使が高麗に戻る。

*表は『新発見日本の歴史』20 鎌倉時代3 朝日新聞社に基づきます。

フビライの国書が第2次招諭使によって日本に初めて届いたのは文永5年(1268)1月の事でした。これを受けて鎌倉幕府は翌文永6年2月、西国の御家人に警戒するよう命令を下しています。また、同年3月には北条時宗が執権に就任しています。

モンゴルは何度も日本に服属を呼び掛けますが、北条時宗はいずれも黙殺しました。時宗がモンゴルの国書を黙殺したのは、時宗がモンゴルを侵略者とみる、来日宋僧などの主に南宋側からの情報に基づき対外政策を進めていたからと考えられます。時宗の対応がより蒙古襲来の危機を高めたともいえますが、実際、幕府は文永8年(1271)9月には、九州に所領を

持つ東国御家人にも九州への下向を命じています。また、翌年からは博多を中心に御家人たちが交代で警備にあたる異国警固番役を始めました。

高麗の対応

第5次の招諭使趙良弼が日本に来る直前、高麗からも使節が博多に来ていました。この時期の高麗は武官の武臣が国王を抑えて政治の実権を握っていました。武臣政権は高麗が1260年にモンゴルに服属した後も遷都などで抵抗を続けていました。しかし、国王派はモンゴルの力を背景にして、1270年にクーデターで武臣政権を倒します。

これに反発したのが武臣政権の軍事部隊である三別抄です。彼らは王族の1人を擁立して済州島などを拠点にしてモンゴルに抵抗しました。趙良弼が日本に来る直前の高麗の使者は三別抄からの使者でした。この使者はモンゴルの高麗侵略を糾弾し、日本に共闘を求めてきたのです。しかし、鎌倉幕府や朝廷は三別抄の反乱が理解できなかったため、モンゴルへの服属を勧めていた高麗がなぜ態度が変わったのか困惑し、彼らに応ずることはありませんでした。なお、三別抄の反乱が1273年4月に平定され、翌年、元は日本遠征を開始します。

文永の役

文永11年(1274)1月、元は高麗に軍船900艘の造船命令を下しました。日本遠征に動員された兵数は、モンゴル人・女真人・漢人合わせて2万人といわれます。ほかに多くの梢工・水手が動員されました。

同年10月3日、元・高麗の連合軍は高麗の合浦を出撃しました。10月5日対馬に上陸し、応戦した守護代宗助国が戦死しています。10月14日に壱岐を襲い、10月20日博多湾の西部(福岡市)に上陸して日本側と激戦を展開しました。日本側は押され気味でしたが、最終的な勝負がつかないまま元・高麗軍は船に撤退し、翌21日博多湾内から元・高麗の軍船は姿を消していました。

弘安の役

文永の役の後、鎌倉幕府は元の再来襲に備えて防備体制を強化します。建治元年(1275)2月、九州の各国が分担して順次警固番役を務めることになりました。そして、同年(1275)4月、元使の杜世忠らが来日しますが、幕府は元使を斬って服属の意思が無いことを示しました。ついで、建治2年(1276)3月から博多湾の防塁(石築地)築造が始まり、同年8月頃には形が整ったようです。

弘安2年(1279)南宋が滅び、同4年(1281)フビライは日本遠征出発の命令を下しました。フビライは日本の元使抑留を遠征理由の第一にあげ、日本の土地・人民の略取を揚言しました。

遠征軍は東路軍（モンゴル・漢 3 万、高麗 1 万、軍船 900 艘、ほかに梢工・水手）と、江南軍（南宋の降伏兵を主体とする 10 万、軍船 3500 艘）でした。東路軍は弘安 4 年（1281）5 月 3 日高麗の合浦から出撃しました。一方、江南軍は 6 月中旬頃から順次出撃しました。

弘安 4 年（1281）5 月 21 日、東路軍は対馬を襲い、壱岐を経て 6 月 6 日博多湾に侵入しました。しかし、東路軍は石築地があるため上陸ができません。そのため志賀島に足がかりを作って日本側と戦いが繰り広げられました。その後東路軍は壱岐に退き、6 月 29 日・7 月 2 日に日本側の攻撃を受けています。

7 月になると東路軍は平戸島や五島列島に達した江南軍と合流し、一挙に博多湾を襲うため鷹島（長崎県松浦市）付近に集結しましたが、7 月 30 日の夜、台風に遭い壊滅的な打撃を受けました。

【参考文献】

『国史大辞典』5 巻「元」岡田英弘 吉川弘文館 昭和 60 年

『国史大辞典』12 巻「文永・弘安の役」川添昭二 吉川弘文館 平成 3 年

『千葉氏の研究』野口実編 名著出版 平成 12 年

『新発見日本の歴史』20 鎌倉時代 3 対モンゴル戦争は何を変えたか 朝日新聞出版 平成 25 年

『東大流よみなおし日本史講義』山本博文 PHP 研究所 平成 27 年

